様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１２３

研究課題名（和文）近世仏師事績データベースの構築

研究課題名（英文）the project produced a computer data base on activity of a sculptor of buddhist image of edo period

研究代表者
長谷　洋一（HASE, YOICHI）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：６０３８８４１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：既刊の報告書や論文、古記録などに掲載された約7000件の近世仏師の事績をもとに仏師ごとのデータベースを構築し、公開した。本研究は構築したデータベースを利用して、近世京都仏師、大坂・江戸仏師、在地仏師の盛衰と三者間での交流を明らかにすることができた。京都での仏像製作需要が減少すると、京都仏師、大坂・江戸仏師が修復や開帳などで地方へ進出すると、在地仏師との技術的交流が生まれ、また京都仏師に繋がる肩書を得ることとなり、在地仏師での造像活動が活発になることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：A record of a sculptor of Buddhist image in about 8000 points of Edo Period is recorded on a previously published thesis, a report and an old record.The information on each record was organized into a self designed framework into a personal computer. As a result, the project produced a computer data base on activity of a sculptor of Buddhist image of the Early Modern period in Japan.
At present, the vast amount of information has been accumulated and classified according to category such as sculptor of Buddhist image. Through referencing, reorganization, practical application of the record is now possible for a variety of purposes.

研究分野：日本美術史

キーワード：近世仏師　データベース　在地仏師　造像と修復　京都仏師　居職と出職

１．研究開始当初の背景

日本彫刻史関係の各種論文や全国各地で行われている仏像悉皆調査報告書あるいは既存の都道府県史や地方自治体史に掲載された近世仏像に記された銘記は仏像の製作や修復等に関わる内容をもち、その施工者である仏師名や施工時期が明らかになる重要な資料にも関わらず、事績数は膨大で、これまで集成したものはわずかに久野健編『江戸仏像図典』（1994 年　東京堂出版）に所収された「仏師解説」や『仏を刻む』（1997 年　堺市博物館）所収の「仏師解説（抄）」に頼らざるをえなかった。

しかし共に典拠については全く触れられておらず、前者は石工、鋳物師なども含まれ、後者では採録された仏師も少なく、近世仏師の事績を手掛かりにして近世仏教彫刻史の解明に資する点ではほど遠い状況にあったといえる。

一方で、各地の仏像調査報告書作成や作品検討を行う際には個々の仏師がどこでどのような活動を行っていたのかが、重要な手がかりとなるが、担当者で個別に文献資料を収集するなどの限界があり、遺漏も多く見受けられた。

近世彫刻史を研究するうえで約 6000 件の近世在銘資料を事前に収集したが、これらをもとにしたデータベースを構築し、一般に公開することで、研究者はもとより、近世仏像に携わる文化財修復者などにも便宜をはかることが大きいものと推測された。またこのデータベースから個々の近世仏師の造像や修復活動はもとより関連する史資料から近世仏師全般の動向や仏師からみた近世彫刻史研究の進展が図られるのはないかと推定できたのである。

２．研究の目的

近世彫刻史を研究する上での基礎基盤となる仏師事績の集成は現在までなされていない。近世彫刻史研究の停滞はこの膨大な銘記データの処理、活用が行われていない点に集約される。従って既刊の仏像調査報告書、市町村史等を網羅した近世仏師事績のデータベース構築は単なる“人名辞典”的位置づけではなく、近世仏教彫刻史研究の進展を図るものとなる。

以下に研究期間内における研究目的を示す。

（1）個々の近世仏師名を検索キーとし、年代（西暦・和暦）・作品所在地・作品名・製作、修復などの区分、銘記、典拠（書誌情報）からなる情報を西暦年の降順に表示するデータベースの構築と一般公開。

（2）構築された近世仏師事績データベースを利用した仏師活動の解明。町仏師と七条仏師からなる京都仏師の活動展開とその推移の解明。

（3）大坂仏師・江戸仏師の活動展開と推移の解明。

（4）在地仏師（近世地方仏師）の成立事情について京都仏師、大坂・江戸仏師のとの関係性の解明。

（5）（2）から（4）までを通した近世仏師からみた近世彫刻史の全体像を提示。

３．研究の方法

（近世仏師事績データベースの構築）

事前に収集調査した 6000 件の近世在銘資料データをもとに年代（西暦・和暦）・作品所在地・作品名・製作、修復などの区分、銘記、典拠（書誌情報）を確認し、独自に設計した構造に従ってパーソナルコンピューターに入力する。

6000 件の入力後、以後刊行された仏像調査報告書、彫刻史関係の論文、刊行物、古記録等の博捜を行い、追加入力を行い、一般に公開する。

（近世彫刻史における全体像の提示）

近世京都仏師のうち幕府御用を務めた七条仏師の動向を把握するため、各個別活動の理解するため近世仏師事績データベースを利用して抽出する。また、従来七条仏師の系譜を知るためには『美術研究』11（1932 年）に所収された翻刻本「本朝大仏師正統系図幷末流」（美術研究本）が利用されてきたが、現在でも原本が行方不明である。東京大学史料編纂所には影写本「本朝大仏師正統系図幷末流」が架蔵されており、美術研究本と東京大学史料編纂所架蔵の影写本は同一原本から翻刻、影写されたとみられることから影写本の調査を行う。

京都町仏師の動向に関しては、近世京都案内記に掲載された「諸職人・仏師」を刊行年ごとに抽出し、その構成員（仏師）の変遷をみるとともに、各仏師の活動動向を近世仏師事績データベースによって把握する。大坂・江戸仏師に於いても同様の所作を行う。

在地仏師については、同様の所作を行いながら、その成立時期及び活動範囲を理解しながら仏師に関せられた肩書に注目する。仏師の肩書は自らの出自や系譜を誇示して付けられることが多く、肩書によって仏師の交流や影響関係を理解する手段となりうる。

４．研究成果

本研究の第一義である近世仏師事績データベースの構築は平成 24 年度中に事前調査分 6000 件の入力を終え、一般に公開した。以後、各地の仏像調査報告書や市町村史、古記録に掲載された近世仏師の事績を加え、補綴を行いながら平成 26 年度末で約 8000 件のデータが累積され、近世彫刻史に関わる研究基盤の基礎資料を提供することができた。

既に、公開された近世仏師事績データベースを利用して『護国山曹源寺』（2014 年、岡山県立博物館）や仏像調査報告書『多可町の彫像』（2015 年、同教育委員会）が刊行されたほか、小山丈夫・伊藤愛加「善光寺『ぬれ仏』（銅造地蔵菩薩坐像）の研究」（『いいづ

な歴史ふれあい館紀要』2、2014 年）など個別研究の資料として利用され、当初予想された成果は達成されたものと思われる。

現在も情報量は遂次されつつあるが、今後も補綴、追加入力を行い研究基盤構築の拡充を計っていきたい。

次に構築したデータベースには個々の近世仏師の居住地、肩書、活動範囲、時代がわかるように項目をたてた。これらの情報からは京都仏師、大坂・江戸仏師、在地仏師（地方仏師）の三者での個々の動向や相互の交流が理解できた。京都仏師は現在に至るまで長い伝統を保っているが、個々の仏師からみれば、江戸時代初期から現在まで続く京都仏師は皆無で、その構成員である仏師も各時期に応じて変化していることが理解できた。その要因のひとつとして江戸幕府御用を勤める京都七条仏師の動向と深く関係している。

従来まで七条仏師の系譜を知るためには『美術研究』11（1932 年）に所収された翻刻本「本朝大仏師正統系図幷末流」（美術研究本）をはじめとする近世編さんの「大仏師系図」が利用されてきた。各種の大仏師系図のうち最も詳細な系譜を示すのは美術研究本であるが、原本は現在も行方不明である。

東京大学史料編纂所には影写本「本朝大仏師正統系図幷末流」が架蔵されており、美術研究本と東京大学史料編纂所架蔵の影写本は検討の結果、同一原本から翻刻、影写されたことが確認できた。そこで各筆跡等を確認し、美術研究本の編さん過程を考察した。その結果、翻刻本では不明でああった各追記、付記が判明したほか、康乗までほぼ一筆で描かれ、その後康祐、28 代康伝と書き継がれていることが判明した。また他の系図との比較も行い、美術研究本が大仏師系図の中でもっとも整備された一本であることも確認できた。

この検討結果から康乗、康祐に変革があることが判明した。

七条仏師（「七条左京」家）は代々世襲されてきたが 25 代康乗には後嗣がおらず、「康祐」なる仏師の子（「康慶」）を養子に迎えた。しかし康慶が幼少であることから七条左京家は康祐が継いだことが明らかとなった。康祐はれまで歴代の七条左京家が継承してきた「東寺大仏師職」を手離し、また長子である康伝を 27 代七条左京家の後継とした。

27 代康伝の後嗣として同名別人の康伝が 28 代を継ぐが、28 代康伝は康慶の子である康閑を補助する立場を取り、以後本家ともいえる七条左京家にわが子を養子へ遣り、その名代は康慶の系譜に戻った。

この状況にあってそれまで康乗の配下にあった仏師はそれぞれ独立し京都町仏師として活躍することとなり、京都のみならず大坂・江戸へ進出し、大坂仏師、京都仏師として活動を展開する契機となったが、この時代は更に別の事態を招くこととなった。大坂仏師の活動が活発になると、中世以来、各地で造像活動を展開していた奈良仏師の一部は大坂へ移住し、また奈良仏師の中心的な活動圏である奈良地方の造像はもっぱら大坂仏師の活動圏にとって代わることとなった。江戸へ進出した京都仏師も江戸に土着し、さらには幕府御用であった増上寺、寛永寺、日光東照宮等の修復などに携わるようになる。幕府御用の一角を江戸仏師が担当することで、奈良仏師と同じく中世以来の伝統を誇る鎌倉仏師の活動範囲にある鶴岡八幡宮の修復にも携わるようになった。

以上のように京都七条仏師内の混乱から京都町仏師の増加、それに伴う大坂・江戸への進出、それによる奈良仏師、鎌倉仏師の衰退という連鎖関係を導くことができた。

また享保 9 年及び寛政 11 年には倹約令の一環として幕府から仏像の像高を 3 尺以下、群像の場合でも 10 体以下という制限が加えられる。この制限令は仏師の活動を著しく制限することになり、従来全国各地に造像活動を展開していた京都仏師は、修復を主体とした小規模な活動に変化していった。さらに享保年間、将軍徳川吉宗は従来続いてきた歴代徳川将軍の御廟を合祀し、回忌の法要も著しく制限することとなり、回忌法要あるいは御廟に安置する諸仏像の数も激減した。このことは七条仏師の活動縮小を余儀なくされたのである。

制限令や吉宗の改革により、京都町仏師は廃業した者も多く、この時期の京都案内記にみえる仏師はそれまでと大きく変化していることがわかる。一方、七条仏師はこれまでの京都大寺院を中心とした造像活動から地方展開を図るようになる。秋田・天徳寺の金剛力士像、山形・永昌寺十六羅漢像、など、「七条左京」が製作した作品が地方に多く残る。これまで漠然と仏像が京都で製作され、地方へ運ばれたと考えられていたが、天徳寺金剛力像の台座に別の宛先が書かれた材木が使用されている点や周辺での修復事例を確認することができることから、少なくとも仏像の据付や修復に関しては、直接七条仏師が地方へ下ったと考えられる。こうした七条仏師の下向は京都町仏師に於いても同様であったとみられる。

こうした据付、修復事業にあって在地仏師（地方仏師）は補助的な役割を果たしていたとみられる。18 世紀以降、在地仏師の多くが京都仏師の「門人」「門弟」と肩書することから京都仏師との交流によって誕生した肩書と考えられる。このことは地方にとって京都仏師というブランドを持つに等しく、「門人」「門弟」を名乗ることで在地仏師の活動は技術的にはさほど向上していないにも関わらず、活動自体より活発化していく結果になる。

大坂仏師では、京都仏師に対する憧憬は在地仏師、江戸仏師ほどなく、また大型の仏像をあまり手掛けていないため従来の活動圏内で製作、修復を行うが、各寺院創建に関わ

る遠忌や開帳などに先だって事業が進められる。その際に周辺の寺院からの造像、修復が依頼されることがあり、地域内でもいくつかの造像活動のピークを迎える時期が認められる。

以上、京都仏師の動向が大坂仏師、江戸仏師を誕生させ、両仏師は、中世の伝統を誇る奈良仏師、鎌倉仏師を駆逐しながら自らの活動圏を拡大した一方、幕府の倹約令に伴う造像制限が京都仏師を地方へと下向させ、そこで在地仏師との交流が生まれた。それまで地方における造像事業で重要な位置を占めなかった在地仏師は京都仏師との関係を肩書に記すことで地方における在地仏師の位置を高めていったと考えられる。もちろん例外も多くあるが、仏師からみた近世彫刻史の大局はこうした展開であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

長谷洋一、「大仏師系図と七条仏師」『關西大學文學論集』、査読無、2014 年、63 巻 4 号、pp.1-49

〔その他〕

http://www.busshi.net/search.cgi

６．研究組織

(1)研究代表者

長谷　洋一（HASE, YOICHI）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：60388410